

研究ノート

## 質的データを用いたソーシャルワーク研究に関する一考察 (その2)

高木 健志  
Takeshi TAKAKI

筆者が関心を寄せている修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach、以下M-GTAとする)について、木下の著書(木下 2003)をもとに要約しながら整理した。特に、拙稿(高木 2011)に続かたちで、概念間の関係から結果図を示すまでの概要を整理した。

さらに、社会的経験と意味構成との関連について中村(2003)の論考をもとに、質的データを用いたソーシャルワーク研究における「視座の重要性」についての検討を行った。

これらのことから、質的データを用いてソーシャルワーク研究を行うにあたっては、研究テーマを前にしたときに、「研究する私自身」はどのような認識から、その研究テーマやデータを、どのように分析していくのか、ということについて自覚的であることが必要とされると考えられる。

キーワード 質的データ、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ、継続的な比較、質的データを用いたソーシャルワーク研究における「視座の重要性」

### はじめに

拙稿(高木 2011)に続き、本稿でも、木下の著書(木下 2003)をもとに要約しながら、M-GTAにおける分析から結果図の示し方までの概要について整理していく。

拙稿では、質的データから、概念の生成までの部分であった。本稿では、概念を生成した後、概念間の関係をどのようにとらえ、そして、そのように結果(グラウンデッド・セオリー)としてまとめていくのか、というところに焦点を当てていきたい。

さらに、社会的経験と意味構成との関連について中村(2003)の論考をもとに、質的データを用いたソーシャルワーク研究における「視座の重要性」についての検討を行っていくこととする。

### I. M-GTAにおける分析、中でも概念生成後から結果を示すまでについて

概念生成までについては、拙稿(高木 2011)ですでに触れていることから、ここでは、概念の生成後から、結果を示すに至るまでを、木下の著書(2003)を整理していくことで理解を深めていきたい。

分析結果を構成するすべての概念は、grounded on data とcoding & retrievalの基本特性を満たしている(2003:210)。

なかでも、M-GTAにおけるカテゴリー形成までのプロセスの特性は、次のように著されている(木下 2003:210-215)。M-GTAでは、個々の概念について他の概念との関係をひとつずつ検討していく。ひとつの概念を起点にそれと関係のあるもうひとつの概念を見出していく作業

を繰り返す。つまり、分析の最小単位は概念であるが、その次の単位は2概念の関係である。2概念が関係づけられたら、それに関係してくる概念は何かを考えるのである。後はその作業を継続して行う。複数の概念の関係からなるカテゴリーは、その延長で浮上してくる。データに密着した（grounded on data）分析から概念を生成し、どの概念もデータから直接生成されているので、次に、そうした概念を個別に関係づけながら、カテゴリーを創っていく方法は、地べたから築き上げていくというイメージ（表現）であらわされることとなる。

グラウンデッド・セオリーは、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTAとする）による分析結果をいうのであるが、分析焦点者を中心とした人間の行動や相互作用の変化、うごき、を説明するものである。

主要な概念やカテゴリーの関係を線や矢印などで表すことで、相互の影響関係や変化のプロセスがわかりやすくなる。全体としての分析が明らかにならなっていくのは、どのようなプロセスなのかという視点である。つまり、単にカテゴリーとカテゴリーの関係を検討するだけでなく、推測的、包括的思考をプロセスに対しても同時に行うこととなる。現象としての何らかのうごきが明らかになってきているかどうかきに注意を払い、ていねいに検討し、図に描いてみる。

ストーリーラインを書くということは、分析結果を生成した概念とカテゴリーだけで簡潔に文章化することである。意味の解釈による質的分析では、特に、自分が理解したと知っていることとそれを文章化することとは同じではない（木下2003：218-220）。

研究のデザインから、テーマの検討、さらに、データ収集と、分析、結果を示すまでのM-GTAにおける一連のプロセスにおいては、特に、研究する人自身が、どう考え、なぜそう考えるのか、という徹底した言語化が重要となるのであると考えている。

## II 比較分析の概要について

GTAでは、分析における質の維持向上のために、比較分析を重んじている。なぜならば、得られた質的データの解釈が恣意的になることを防ぐことが可能となるからである。GTAを考案したGlaser & Straussは「質的分析のく絶えざる比較法」（1986=1993：145-167）として示している。絶えず比較して考えていくことの重要性について、分析者はデータ内の多様性を考察せざるをえなくなることから、データに密接に対応した複雑な理論を達成できる確率が高くなる、としている（1986=1993：162）。さらに、多様性の考察は、できる限り多くの類似と相違を探るという観点から一つ一つできごとを他のできごとと比較したり、一つのカテゴリーを構成する諸特性と比較することである（1986=1993：162）。

さらに、M-GTAでは「多重的同時並行思考」として、分析を行うにあたって最も重要な点の一つとして提示されている。これは、ひとつの概念を生成するときに同時にそれと関係しそうな概念の関係をも考える、ということである（木下2003：153）。

例えば、「起点にする」ということを考える。そして、起点にしないことに関するデータは見当たらないか、データ分析において、データを目的的に読み込んでいくこととなる。

その結果、対極例のデータが見当たれば、それをヴァリエーションにし、理論的メモにそのデータに関するアイデアを書き込み、さらに他のデータが見当たらないかを読み込んでいくこととなる。その結果、対極例に類似したデータがあればヴァリエーションとして加えていくこととなる。そして、そのヴァリエーションを説明できる定義を考え、それを表す概念名を命名することで、分析ワークシートが作成されていくこととなる。概念生成レベルにおける比較分析となる。

さらに、この後、概念と概念間のレベルにおける比較分析がある。

たえず比較分析の作業を行っていることによつて、思考が整理され、質的研究における質の向上

を行うことが可能となる。なぜならば、「これはなぜだ?」という問いかけに対して、豊富な思考に裏打ちされた豊かな説明力を持つことで、他者にとっても、その分析や結果が十分に了解可能なものとなり得るからである。

ひとつの概念を生成するときに、同時にそれと関係しそうな概念の可能性をも考える。それは、多重的同時並行思考を行うことで、概念相互の関連性を絶えず検討していくことが可能となる。

それでは、なぜ、この思考方法をGTA特に、M-GTAでは採るのだろうか。

データの中で表現されたり、現れているコンテキストの理解を重要視するのがM-GTAである。なぜなら、M-GTAではデータに反映されている人間の認知や、行為、感情、そしてそれらに関係している要因や条件などを、得られた質的データに則して丁寧に検討していくことが重要である。その理由は、「全体の流れを読み取ること」を重要な位置づけにおいて考えられているからである。

例えば、筆者が関心を寄せるソーシャルワークにおいて、ソーシャルワーカーとクライアントとのかかわり、さらにソーシャルワーカーとクライアントを取り巻く環境とのかかわりや、ソーシャルワーカー自身の思考や感情、意思決定に影響を与える要因などは複雑な状況にあることが多いとすれば、そうした複雑さに着目した上で理論の産出を試みていくことも重要なこととなる。そのためには、設定された研究テーマにもよるが、ソーシャルワークの実践場面は一般的な社会生活以上の複雑さがあるとすれば、得られた質的データに表されているコンテキストを切断することなくその解釈を行うことで意味を理解していくことが重要となっていくであろう。その点においては、全体の流れを読み取ることを重視するM-GTAは得られた質的データの分析方法の一つとして有用である。

M-GTAは、得られた質的データにあるコンテキストの意味を解釈することによって、人間行動と相互作用にかかわる何らかの動きを明らかにしていくことになる。研究テーマにかかわりがありそうな言葉であったり、表現などを拾い上げてい

くことでは決してなく、コンテキストの意味を解釈する方法であると考えられるのである。

### Ⅲ 質的データを用いたソーシャルワーク研究における「視座の重要性」について

質的データを基にした研究においては、恣意的解釈や分析ではないか、という点からの問いかけを受けることが少なくはない。しかし、ここまでみてきたように、例えばGTAにおいては、そのことを防ぐために、比較しながらの継続的な分析という仕組みがある。

さらには、徹底的な思考の言語化を必要とする質的研究においては、研究する人がどのような視座に立つのかという点について自覚的であることが必要なのではないかと考える。浅学の身である筆者なりに質的研究に関連する視座であろうと考えられることがらについては、拙稿でその全体における整理を試みた。本稿では、それを発展させていくために、特に人と人、人と環境、といった複雑な関係について考えをすすめていくための契機を得るために中村(2003)の論考から検討した。

中村(2003)は、「便宜上」とことわったうえで、社会唯名論のうち、人間を問題圏とするものを<社会的行為論>、社会と人間ないし個人と個人の相互作用を問題圏にするものを<相互作用論>と措定し、パラダイムの類型について論じている。中村は、ハンセン病患者を対象としたフィールドワーク体験をモチーフにして、社会的行為論がもつ独我論的傾向を相対化させるため、Schutz.Aの「至高の現実」概念をもとに論考を深めている。このなかで、社会学理論のパラダイムについて触れている。それによると、それぞれのパラダイムには、それぞれの特徴と隘路について整理される(表1)。

まず、<社会实在論>の特徴には、主観性や個別性、あるいは非現実的なものを排除することにより、観察という自然科学の方法論に基づく法則科学的な立論形式をとることが可能となる(2003:92)。その隘路としては、社会的な力に

表1 中村による指摘の整理（中村：2003より筆者作成）

	社会实在論	社会的行為論	相互作用論
特徴	主観性や個別性、あるいは非現実的なものを排除することにより、観察という自然科学の方法論に基づく法則科学的な立論形式をとることが可能となる。	社会的現実が、法則や集会的な性格を刻印された同一的なものとしてあることを許容しつつも、むしろその力点は行為者自身の意識において構成される意味現象としてとらえる。	社会实在論が捉える集会的な局面も、社会行為論が捉える意味構成という主観的局面も、相互作用という社会的局面のなかに位置づけなおされ、共同的なものとして社会的現実や社会構築体が構成される過程を掬い上げることができる。
隘路	社会的な力に規定されえないものや、この社会的力を超越したり破壊させ否定していくようなもの、新奇なもの、特定の社会的な力にとって例外的なものや偶然的なもの、さらには「集会的」なものへの対極をなす個別的で主観的なものなど、社会的現実を多様ならしめるものを捉えることが、最初から放棄される。	相対化の契機を自己忘却することにより、主観的現実の絶対化を帰結する点。	相互行為やコミュニケーションといった一連の社会的な出来事がなぜ生じたのかという発生的な捉え方が、十全に保証されない。

規定されえないものや、この社会的力を超越したり破壊させ否定していくようなもの、新奇なもの、特定の社会的な力にとって例外的なものや偶然的なもの、さらには「集会的」なものへの対極をなす個別的で主観的なものなど、社会的現実を多様ならしめるものを捉えることが、最初から放棄される（2003：95）。

次に、〈社会的行為論〉の特徴としては、社会的現実が、法則や集会的な性格を刻印された同一的なものとしてあることを許容しつつも、むしろその力点は行為者自身の意識において構成される意味現象としてとらえる点を指摘している（2003：93）。隘路として、相対化の契機を自己忘却することにより、主観的現実の絶対化を帰結する点がある（2003：98）。

また、〈相互作用論〉の特徴としては、社会实在論が捉える集会的な局面も、社会行為論が捉える意味構成という主観的局面も、相互作用という社会的局面のなかに位置づけなおされ、共同的なものとして社会的現実や社会構築体が構成される

過程を掬い上げることができる（2003：93）。その隘路は、相互行為やコミュニケーションといった一連の社会的な出来事がなぜ生じたのかという発生的な捉え方が、十全に保証されない。社会の発生は社会過程のなかに解消され、常に社会過程のなかにある社会を前提に、相互行為やコミュニケーションがいかに形成されるのが問題にされたり、あるいは相互作用にもたらされる限りでの動機のみが問題にされるだけで、そもそもなぜそこに特定の社会過程が発生したのかという初発の発生的な問題系は最初から排除される点があることを指摘している（2003：95-96）。

特に、人と人、人と環境との関係について、ソーシャルワークによってかかわっていくソーシャルワーク実践の理論化や理論の産出においては、行為における意味の解釈と、経験的知識の再編成とが非常に重要となってくると考えることができるのではないだろうか。当然ながら、質的データを用いて研究をすすめていくには、認識論に対する理解とそれによって得られるであろう、

研究における視座が重要となると考えられる。

### おわりに

ここまで、質的データを用いたソーシャルワーク研究方法について、特にM-GTAについて焦点をあて、その方法論について概要を整理してきた。拙稿(高木 2011)で述べたとおり、M-GTAについては、提唱者である木下の一連の著書(1999、2003、2007)に加えて、すでにその方法論を用いて研究されたものなどが刊行されている(石山2010、村杜 2005、三毛 2005、長崎 2010、住友 2007、山野 2009、横山 2008)。本稿では、要点の整理にとどまらざるを得なかったという点については、筆者の未熟さである。今後さらに歩を進めていくこととする。

さらに、ソーシャルワークという複雑な関係における行為という事象に対する視座を得るために、中村(2003)の論考をもとに考察を行った。この点に着想したのは、特に相互行為に着目した視座についての考察を深めたいと考えていたためである。

しかしながら、浅学極まりない筆者では、方法論にしても、視座にしても、及んでいない点が多々ある。しかしながら、未熟者の筆者に、このようなチャレンジの機会が与えられるこのような環境に感謝したい。

今回、研究方法論について、特にソーシャルワーク領域の研究における質的データという点に着目してきたのは、住友(2006:263)が指摘しているとおり、質的データを得る方法としてのインタビューとソーシャルワークとの親和性があるからこそ、多くの人に質的データを用いた研究方法については、広く関心を持ってもらいたいと思っているからである。そして、さらには、質的データを扱う研究方法について、より深く、正しい理解がされていき、方法論の選択において、そのヴァリエーションが豊富になることで、一般的な社会関係よりもより複雑な関係でもって展開されることの多いソーシャルワーク実践から、理論が産み出されていくことにつながっていくと現時点で筆者自身は考えている。

今後は、質的データを用いたソーシャルワークの実践についての研究に取り組んでいきたいと思う。

### 【文献】

- Barney G.Glaser and Anselm L.Strauss (1967) *The Discovery of Grounded Theory.* (=1996. 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型の理論』新曜社)
- 石山崇章(2010)「知的障害者の就労に関する雇用者の問題意識の構造」風間書房.
- 木下康仁(2003)「グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い—」弘文堂.
- 木下康仁(2003)「ライブ講義M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて」弘文堂.
- 三毛美代子(2003)「生活再生にむけての支援と支援インフラ開発 グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく退院援助モデル化の試み」相川書房.
- 村杜卓(2005)「ソーシャルワーク実践の相互変容関係過程の研究」川島書店.
- 長崎和則(2010)「精神障害者へのソーシャルサポート活用 当事者の「語り」からの分析」ミネルヴァ書房.
- 中村文哉(2003)「社会的行為と相対化の問題について1) —モチーフとしてのハンセン病経験者の生と「知覚の現象学」の社会的可能性—」『立命館産業社会論集』39(1), 87-107.
- 住友雄資(2006)「第6章 ソーシャルワーカーのための質的インタビュー」, 杉本敏夫・住友雄資編著, 251-264, 中央法規.
- 住友雄資(2007)「精神保健福祉士のための地域生活支援活動モデル 対人援助職の成長プロセス」金剛出版.
- 高木健志(2011)「質的データを用いたソーシャルワーク研究に関する一考察(その1)」『山口県立大学社会福祉学部紀要』17, 67-77.
- 山野則子(2009)「子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク—グラウンデッド・セオリー・アプローチによるマネジメント実践理論の構築」
- 横山登志子(2008)「ソーシャルワーク感覚」弘文堂.

## Consideration of Social Work Research Methodology for Qualitative Data (II) .

Takeshi TAKAKI

Recently, in a study in social work, analytical techniques have been used for a variety of techniques and research, This is the challenge of overcoming the gap between theory and practice in social work for the deepening of social work, and say that's tied going into a steady practice and research as inseparable and there is no sort of Will.

Then, it arranged it in this text while summarizing M-GTA by which the author was having interest based on the book (Kinoshita: 2003) ,In addition, the review in the Social Work area where GTA, M-GTA concerning the area of the Psychiatric Social Work Research.

and, I performed examination about the value that the constitution of the meaning in the social work study brought based on a study of Nakamura (2003) about an association between social experience and meaning constitution.

When I faced a study theme in the study using qualitative data from these on performing a social work study using qualitative data, it is thought that a conscious thing is required about what kind of recognition "myself studying" it analyze the study theme.

Key words;Qualitative Date, Modified Grounded Theory Approach, Continuous comparison, Importance of the point of view in qualitative data